スーパーロボット大戦ＬＡ

国伊都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパーロボット大戦ＬＡ

【Ｎコード】
Ｎ６９４９Ｃ

【作者名】
国伊都

【あらすじ】
新西暦１８７年。地球連合軍に所属する『ケイ・シドウ』はある機体のテストを任される。それが永きにわたる戦いの幕開けとも知らずに……。

プロローグ（前書き）

この作品は、某携帯サイトで公開されているスーパーロボット大戦の二次小説に共感を受け、製作したものです。

スパロボシリーズは好きだが、こんなの認めない！　という方は、回れ右してください。

プロローグ

新西暦と呼ばれる時代。
人類が宇宙に進出してから2世紀近くが過ぎていたが、人々の生活そのものは21世紀初頭とさほど変わらない時代……。
その理由は、地球に落下した2つの隕石による被害と混乱のため、人類の進歩が一時的に停滞したからであった。

そして、それらの混乱により、宇宙へと進出していた人々――スペースノイド――特に過酷な環境である宇宙に進出するため、遺伝子を最適化した人々……コーディネイターと地球に住む人々、ナチュラルとの間に軋轢が生まれていった。

そんな中、新西暦179年、地球からもっとも遠いコロニー群であるサイド3が突如『ジオン公国』と名乗り、地球圏の連合政府……地球連合に反旗を翻し、戦争状態へと突入していく。これが後の『一年戦争』である。
しかしこの戦争は勝敗が決することなく突如終わりを告げる。
それは同年、連合とジオンの雌雄を決する戦い『ソロモン会戦』中に突如現れた3つ目の隕石『メテオ3』によって両軍の戦力の大半が巻き込まれ、消失したからであった。
互いに疲弊した両勢力は停戦協定を結び、仮初であるが地球圏に平和が訪れた。

また同時期、地球圏でも有数の頭脳を持つ『ビアン・ゾルダーク博士』が政府の依頼の下、調査団を結成。南マーケサイズ諸島沖に落下したメテオ3の調査を行った。

その結果メテオ３が人工物であるけとが判明。そこには人類にとって未知の物質と技術の情報が封印されていた。
それらは『ＥＯＴ（Ｅｘｔａ・Ｏｖｅｒ・Ｔｅｃｈｎｏｌｇｙ）』と称され『ＥＯＴ特別審議会』と『ＥＯＴＩ機関』による厳重な情報管理の下、調査が進められた。
そして、ＥＯＴＩ機関の代表であるビアン博士は、研究結果から地球外知的生命体による侵略の危機を地球連合政府、連合軍に示唆……。
それを受けて人型機動兵器『パーソナルトルーパー』の開発が開始された。

そして１８７年。
物語は、月に拠点をかまえる『マオ・インダストリー』から始まる。

参戦作品（前書き）

参戦作品は、暫定的なものです。今後変化するかもしれません。

参戦作品

機動戦士ガンダム機動戦士Ｚガンダム
機動戦士ＺＺガンダム
機動戦士νガンダム
機動戦士ガンダム００８３―スターダストメモリー―
機動戦士ガンダム第０８ＭＳ小隊

機動戦士ガンダムＳＥＥＤ
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　アストレイ＆ＭＳＶ
機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ

マジンガーＺ
グレートマジンガー
マジンカイザー

ゲッターロボ
ゲッターロボＧ
真ゲッターロボ
コンバトラーＶ
ボルテスＶ
ダンクーガ

ギャラクシーエンジェル三部作

機動戦艦ナデシコ　　劇場版機動戦艦ナデシコ―ｐｒｉｎｃ　ｏｆ　ｄａｒｋｎｅｓ―

バンプレストオリジナル

作者オリジナル（キャラクター、バンプレストオリジナルの機体の設定に変更あり）

参戦作品（後書き）

ギャラエンはないだろ！と思う方は、回れ右してください（できれば見て欲しいですけど）

第1話　『テストパイロット』（前書き）

お待たせしました。やっと本編にはいります。

第1話　『テストパイロット』

新西暦１８７年
月面都市セレヴィス・シティ宇宙港ターミナル

（ケイ）
「第５ゲート……確かここで待ち合わせだよな」

人々が行き交う中、Ｄコン（この時代の高性能端末）に表示されたメモに目を通しながら、肩まで伸びた美しい黒髪と透き通るような碧眼が特徴的な青年は、呟く。

（？？？）
「あーいたいた！　おーい！」

丁度その時、ゲートを挟んで青年から反対側の方から、に呼びかける声が聞こえてきた。　青年がそちらに目を向けると、蒼色の髪をウルフカットにした青年がこちらに軽く手を振っていた。

もしかして……。
と思った青年はゲートを抜け、そちらに歩み寄った。
（？？？）
「君が、ケイ・シドウ少尉だよな？」

（ケイ）

「はい、そうですが。自分の名前を知っているということは……？」

（イルム）
「ああ、俺はマオ・インダストリーから君を迎えに来た、イルムガルド・カザハラだ」

（ケイ）
「イルムガルド、……！？　失礼しました中尉！！」
青年……ケイは目の前にいる人物が自分と同じく軍人であり、なおかつ自分より階級が上であることに気づき、急いで敬礼をした。

（イルム）
「ふっ……ケイ、今の俺はマオ社に出向中の身だ。つまりサラリーマン……階級を気にする必要はない。
だからそう肩肘をはるな」

真面目なケイの行動に、イルムガルドは苦笑する。

（ケイ）
「ですが……」

（イルム）
「ですがもないさ。
まっ、俺のことはイルムと呼んでくれ。
それができないなら『イルム先輩』でもいいが」

（ケイ）
「……それでは、イルム先輩と」

（イルム）
「そうか。
それじゃ、時間もないことだし、行くとするか」

（ケイ）
「はい！」

イルムの言葉に頷き、ケイはイルムとともにマオ・インダストリー社へとむかった。

（イルム）
「ケイ。お前、士官学校を首席で卒業したんだってな」

マオ社への道のりの中、エレカでイルムと世間話をしている内に、その話が出てきた。

（ケイ）
「ええ、まあそうですが。ですけど所詮、学校の成績ですから」

（イルム）
「だが、すごいことには変わりないさ。俺なんて中の下だぜ。……まっ、ちょっとプライベートの方に力を入れてたってのもあるが」

軽い口調で、イルムが謙遜するケイをフォローする。
それに思わず笑ってしまうケイ。　イルムガルドの趣向は、軍内でも有名なのだ。

（ケイ）

「ふふっ……まあ、張り合える友人がいたおかげなんですけど」

生真面目で、日本文化の好きな『ライバル』の姿を思い出しながらケイは言葉を紡ぐ。

（イルム）

「まあ、ライバルってのはいつの時も必要なもんだよな」

（ケイ）

「ええ」

そんなことを話している内に、

2人の乗るエレカはマオ社のすぐそこまできていた。

マオ・インダストリー本社

（イルム）

「荷物の方は、宿舎に届いてるはずだから、帰ったら確認してくれ」

（ケイ）

「はい」

（イルム）

「それじゃ、社長のところに挨拶しにいくか」

（ケイ）

「は、はい」

ケイも頷き、イルムの後をついていく。

（イルム）
「まあ、そう緊張すんなっ。社長といったって、そんなおっかねえもんじゃないしな」

（ケイ）
「は、はあ」

（イルム）
「だが……怒らせると怖いぞ」

（ケイ）
「……」

そんな冗談を言ってる内に、社長室へと到着。

コン、コンッ。
（イルム）
「リン、俺だ。入るぞ」

ぞんざいな口調でイルムは言うと、パスコードを打込み、扉を開けた。

（？？？）
「……すこしは、敬意を払ったらどうだ？　イルム」
（イルム）
「まあ、いいじゃないか。俺とお前の仲なんだし」
（？？？）

「ふん……まあいい。それで、そちらの彼が」

（イルム）
「ああ……それ挨拶しな」

イルムは部屋の主に頷くと、ケイを促す。
それに応え、ケイ一歩前へ出ると、目の前にいる人物に敬礼する。

（ケイ）
「連合軍より出向してまいりました、ケイ・シドウ少尉であります！」

律義に挨拶するケイに、朱色の髪をゆらし満足した表情で頷くと、部屋の主はデスクチェアから立ち上がり返答する。

（リン）
「マオ社の社長を務めている、リン・マオだ。よろしく頼む、シドウ少尉」

凛と通る声でそう言い、彼女……リン・マオはケイをソファへ促す。

（リン）
「まあ、座りたまえ」

（ケイ）
「はい、失礼します」

頷き、ソファに座るケイ。リンも向き合うように彼の反対側に座る。　ちなみにイルムはリンの隣りに座った。

（リン）

「まずは礼を言いたい。よく来てくれたシドウ少尉。
我々マオ社は君を歓迎する」

（ケイ）
「ありがとうございます。
ですが、礼を言われることはありません。
この任務も大事なものであるのはわかっていますから」

（リン）
「そうか、そう言ってもらうとありがたい。
……それでは早速、仕事の話をしよう。

君には、我が社が社運を賭けて開発を進めているある試作機のテストパイロットを務めてもらいたい」

リンはそう言い、ケイに一冊のファイルを渡す。
その表紙には、

『ＲＴＸ－０１０－０３』

と、書かれてあった。

（ケイ）
「これは、……！？　まさか！？」
ファイルを開き、閲覧したケイは、そこに記された機体名を見て、思わず驚愕の声を上げてしまう。
その反応に、しかしリンは別段驚くことなく、厳かな口調で彼に告げる。

（リン）
「……そうだ。ヒュッケバインの後継機……ＭＫ－２だ」

それは、
『バニシング・トルーパー』
と呼ばれる機体の名だった。

第1話　『テストパイロット』（後書き）

一応主人公機は、ヒュッケです。（作者はどちらかといえばゲシュが好きです。特にＭＫ－３が）　　しかしながら、この話に出てくるヒュッケは原作とはちと違います。そこらは、本編で明していくので。

また、バンプレストオリジナルのキャラが出演していますが性格などが原作と微妙に違うかもしれませんが、そこはご愛嬌ということで。

第2話　『バニシング・トルーパー』（前書き）

お待たせしました。第二話です。楽しんで読んでいただければ、幸いです。では、どうぞ～♪

第2話　『バニシング・トルーパー』

（ケイ）
「……バニシング・トルーパー……」

そう呟くケイの声音は、驚愕や畏怖、困惑が複雑に絡み合っていた。

（ケイ）
（バニシング・トルーパーのテストを……俺が……？）

いったい何故？　どうして？
俺がパイロットを？
ケイの頭には、様々な疑問符が浮かんでは消えていく。

（リン）
「……イ、ケイ・シドウ少尉！」

（ケイ）
「……っ！？　は、はい」

自分の世界に入っていたケイは、自分の名を呼ぶリンの声に思わず驚いてしまう。

（リン）
「大丈夫か、シドウ少尉？」

（ケイ）
「は、はい。大丈夫です」

リンの心配げな問いかけに、ケイは頷く。しかし、その声には言い様のない不安がにじみ出ていた。
そんな彼の姿を見、イルムは苦笑する。

（イルム）
「やっぱり嫌か、ヒュッケバインのテストパイロットは？」

（ケイ）
「あっ……いえ！　そう言うわけでは！？　……ただ……」

（イルム＆リン）
「ただ？」

ケイは、イルムとケイを真っ直ぐ見つめ言葉を紡いだ。

（ケイ）
「ただ、お二人はご存じかと思いますが……私の義父は、かつてこのマオ社に勤めていました」

これにゆっくり頷くリン。

（リン）
「ああ、シウン博士だな」

（ケイ）
「はい……」

（リン）
「……惜しい人を失ってしまった……」

リンはどこか哀しげな声で呟くと、ケイに頭を下げた。

（リン）
「すまない」

この行動に驚き、ケイはしどろもどろになってしまう。

（ケイ）
「しゃ、社長！？　あっ、頭を上げてください！！」

（リン）
「だが、少尉の身内を死に追いやってしまったのは、私だ。だから……」

（ケイ）
「社長……私はあなた方に他意があって、この話をしたわけではありません」

ケイはむしろ感謝しているのだ。
ケイの義父を死に追いやり、『バニシング・トルーパー』という不名誉な二つ名を生み出したヒュッケバインの暴走事故は、軍・マオ社双方で多大な犠牲を出したが、その後の事後処理は双方で違っていた。

軍は機密を理由に事故のくわしい情報を遺族たちにつたえること

なく、また彼らに対しての支援もほとんどしなかった。

だが、マオ社は違っていた。

マオ社は、出来うる限り情報を遺族たちにつたえ、謝罪をし、きちんとした経済支援を行ってくれた。

もしこの支援がなければ、ケイとシウン博士の実子で弟分のトウヤは今ごろ、路頭に迷っていただろう。

（ケイ）
「ですから、頭を上げてください」
（リン）
「そうか……」

ケイの言葉に頷き頭を上げるリン。
と、丁度そこでイルムが話を元にもどした。

（イルム）
「それで、テストパイロットは引き受けてくれるよな？」

（ケイ）
「はい。もちろん」

力強くケイは頷く。

（イルム）
「そうか、引き受けてくれるか！　まあ、お前が受け持つ機体は、ぜひともお前に乗ってもらいたかったからな」

（ケイ）
「それはどういう……」

イルムの言葉が気になり尋ねる。

（イルム）
「実はな、お前が受け持つ機体には、シウン博士が研究をしていたあるシステムが、特別に組み込んであっな。生前、お前にテストを頼みたかったらしいんだ」

（ケイ）
「そうだったですか？」

その話は初耳だったので、ケイはかるく驚いた。

（リン）
「ああ。……感傷になるが、博士の遺志を尊重したくてな」

リンはイルムの言葉を引き継ぐと、立ち上がりケイに向かって手をさしだした。

（リン）
「ＭＫ－２をよろしく頼む、シドウ少尉」

（ケイ）
「はいっ！！」

元気よく頷きケイはリンの手を握った。

マオ・インダストリー本社，第二ブリーフィングルーム

（ユアン）
「――このヒュッケバインＭＫ－２は、連合軍の次期主力量産ＰＴの試作機として開発されたものです」

会議室にも使われる第二ブリーフィングルームでケイは、マオ社の創設期からの社員で現在、リンの右腕として辣腕をふるっている重役ユアン・メイロンから直々に、デジタル画像を使った機体の説明を受けていた。

（ユアン）
「このＰＴはその名の通り、我が社連合軍から依頼を受け開発した『ＲＴＸ－００８／００９ヒュッケバイン』の後継機にあたり、００８、００９と同じく、ＥＯＴＩ機関から提供されたＥＯＴを搭載されています。

ところで少尉、あなたはＥＯＴのことをどこまでご存じですか？」

この質問に、ケイは少し考え答えた。

（ケイ）
「……『エクストラ・オーバー・テクノロジー』……メテオ３から発見された地球外知的生命体の技術の総称で、現在の地球圏の技術より数段優れたもの……。それぐらいしか」

マオ社への出向が決まって得られたＥＯＴに関しての情報は、レベル１の機密に記されていたそれぐらいでしかなかった。

（ユアン）
「それだけわかっていれば充分ですよ。……補足しますと、現在までに解析されたＥＯＴは各分野で応用されています。

例えば、テスラ・ライヒ研究所で開発された推進装置『テスラ・ドライブ』……各地域の発電施設で運用されている核融合電池の制御法など……あげればきりがありませんね」

ユアンの説明に感心し頷くケイ。そして同時に心の中で呟く。

（ケイ）
（地球に多大な被害を……そして今後地球に攻めてくるかもしれない異星人の技術が、地球人の進歩に役立つなんて……）

とんだ皮肉だな、と。
まるで、サンタクロースからのプレゼントみたいだ。

――それとも、パンドラの箱か？――

（ケイ）
（……）

おもわず脳裏によぎった言葉に、数瞬考えてしまう。

（ユアン）
「……どうかしましたか？」

（ケイ）
「えっ……あっ、いえ」

ユアンの声に思考をもどしたケイはそう呟き、説明の続きを促す。
ケイの状態を気にしながらも、特に問題はないと判断したユアンは説明を続けた。

（ユアン）
「……話がそれてしまいましたが、ヒュッケバインＭＫ－２はそういった現行の技術とは一線を画す技術の結晶で、現在連合軍で幅広く使用されているＭＳ（モビルスーツ）を超える機体なのです。

そして、あなたにテストを行ってもらう機体は試作３号機で、この機体には推進装置に先ほどもあげました『テスラ・ドライブ』と、あなたの義父であられたシウン博士が生前開発した操作・戦闘補助システムの『サイトロンシステム』モジュールを搭載しています。

ＭＫ－２の説明は、これらでよろしいですか？」

ユアンはＭＫ－２の説明をそう締めくくると、ケイに尋ねた。

（ケイ）
「はい。……ただ、一つだけよろしいですか」

（ユアン）

「はい、なんですか？」

（ケイ）
「義父が開発した『サイトロンシステム』とは、具体的にどういったものなのですか？」

ケイの質問に、ユアンは一瞬虚をつかれた顔をしたあと、苦笑いを浮かべた。

（ユアン）
「……実は、私たちも詳しいことはわからないのです」

（ケイ）
「えっ……？」

ユアンの言葉に一瞬呆然となるケイ。

（ケイ）
「わからないとは……」

（ユアン）
「そのままの意味です。……我が社のスタッフが総力をあげて調べたのですが、詳しいことはなに一つ……。
ただ、残された資料を調べたところ、ゲシュペンストを使用したシミュレータ実験では、通常機にくらべかるく６０％もの機能向上が見込まれるという結果がでていたのです」

（ケイ）
「そうなんですか」

ある一つのシステムで、それほどまでの機能向上が見込まれるのであれば、凄いことだ。

（ユアン）
「はい。そしてその資料とともにあったリストにあなたの名前がのっていたのです。

ですから我々は、試作３号機にシステムモジュールを搭載し、士官学校を卒業したばかりのあなたをテストパイロットとして呼んだのです」

ユアンの言葉を聞き、ケイはイルムの言っていた意味を理解する。

（ユアン）
「ですのであなたには、ＭＫ－２のテストと同時に、システム解明のための手伝いもしていただきたいのです」

（ケイ）
「……わかりました。ケイ・シドウ少尉、全力をもって任務にあたらせてもらいます！！」

（ユアン）
「ありがとうございます。では、そろそろ格納庫に向かいますか」

（ケイ）
「はい！」

ユアンの言葉に頷き、ケイはヒュッケバインＭＫ－２のまつ格納

庫へと歩みを進めた。

マオ・インダストリー本社，第一試験格納庫

ケイが第二ブリーフィングルームから第一試験格納庫に向かったその頃、イルムは一足先に格納庫へと来ていた。

（イルム）
「それで……少しはわかったことはあるか？　ラーダ」

ケイがテストを行うＲＴＸ－０１０－０３を見上げ、イルムは隣りに立つ女性に尋ねた。
それにラーダと呼ばれた褐色の肌と緑の髪が特徴的な美女は、力なく首を横にふった。

（ラーダ）
「いえ……ただ、このシステムに似ているものをあげるとすれば、１号機やタイプＴＴに搭載されている――」
（イルム）
「Ｔ－ＲＩＮＫシステムか……」

イルムの言葉にラーダは首肯する。

（イルム）
「ということは……あいつも“念動力者”ってやつなのか？」

（ラーダ）

「わかりません。……ですが、αパルステストでは、これといった反応は出ていませんし、博士の経歴を調べてもコバヤシ博士との接点は見つけられませんでした」

ラーダの言葉に首をひねるイルム。

（イルム）
「それじゃあいったい――」

とそこで格納庫の扉が開き、ユアンとネイビーブルーのパイロットスーツに身をつつんだケイが入ってきた。

（ケイ）
「イルム先輩、来てたんですか？」
（イルム）
「ああ。一応俺も、この機体の開発に携わってたからな。
ああ、そうそうこちらの女性はヒュッケバインの開発チームメンバーのラーダだ」

（ラーダ）
「はじめまして、ラーダ・バイラバンです。
よろしくお願いしますね、ケイ・シドウ少尉」

（ケイ）
「はじめまして、ラーダさん。自分のことはケイと呼んでください」

そう言って、ケイはラーダと握手を交わす。

その時――。

（ケイ）
（ん……？　なんだ？　この感覚……？）

ケイは、不思議な感覚に襲われる。

（ケイ）
「あの……ラーダさん……」

（ラーダ）
「はい、なにかしら？」

（ケイ）
「あ、いえ……なんでもありません」

（ラーダ）
「そう……」

かるく頷くラーダの方も、

（ラーダ）
（やっぱり……。でも……彼女たちとは、なにかが……）

今までとは違う感覚に内心首を傾げていた。

（ケイ）
「そ、それで、これが……ヒュッケバインＭＫ－２なんですね」

妙な空気が漂ってしまったとかんじたケイは、多少強引であった

が目の前にある巨人に目をやり、話を変えた。

（ラーダ）
「ええ、そうよ」

ケイの考えに気付いたラーダは優しい声音で頷く。
３人の目の前に、それはあった。

全長は２０ｍほどで、テスト機だからだろうか、紺色のカラーリングに統一されていた。　頭部は、連合の象徴的モビルスーツである“ガンダム”に似た、鷹の目のように鋭い一対のデュアルセンサーとブレードアンテナで構成されていた。
同じくマオ社が製造したＰＴ『ゲシュペンスト』とは違い、スマートな体つきをしていて、
格闘戦よりも射撃戦を得意とするような印象を受ける。

（ケイ）
「ゲシュペンストよりもずいぶん細いですね……」

思ったことをつい、ぽろっと出していた。

（ラーダ）
「ええ、そうね」
苦微笑して頷くラーダ。
これに失言だと気付いたケイは慌てて、

（ケイ）

「あっ！？　いえ、別にふ、不安とか、そんなんじゃ――！？」

（ラーダ）
「ふふっ、いいわよ別に、そんなに慌てなくても。……確かに、ゲシュペンストを使い慣れている人には、おもわず不安になってしまう姿だから」

確かにその通りだった。
現在、連合軍で使用されているＰＴ『ゲシュペンストＭＫ－２』は目の前にある機体よりもがっちりしていて、安心して搭乗できる姿をしていた。

（ラーダ）
「でもね……このヒュッケバインＭＫ－２には、地球の伊豆基地で進められている《ＳＲＸ計画》で解析されたＥＯＴの【ゾル・オルハルコニウム（Ｚ・Ｏ）】というレアメタルを特別に使用しているし、重力軽減システム【グラビコン・システム】を利用した防御シールド“Ｇ・ウォール”もあるし、機体フレームにいたってはゲシュペンストＭＫ－２のフレームを使用しているの」

（ケイ）
「ゲシュペンストのフレームを？」
おもわず聞きかえすケイにラーダは頷く。

（ラーダ）
「ええ……。
理由は量産化をふまえたコストダウン。
装甲材にかんしても、量産型ゲシュペンストＭＫ－２のノウハウを応用した素材を開発中よ」

Ｚ・Ｏに関しては、ＥＯＴの信頼性を上げるためのテストでね……。

とラーダは話を締めくくった。

（イルム）
「じゃあ、ケイ。そろそろ機体に搭乗してくれ。
……コックピットの仕様は、ゲシュペンストと変わりないから、すんなり使えると思う」

（ケイ）
「はい。わかりました」

（ラーダ）
「ケイ、ＯＳの方も士官学校時代のあなたのデータに合わせて調整しているから」

（ケイ）
「ありがとうございます、ラーダさん」

イルムとラーダにそれぞれ返事をすると、ケイはヘルメットをかぶり機体が収納されているハンガーの簡易エレベータに乗り、コックピットに向かった。

ＲＴＸ－０１０－０３ヒュッケバインＭＫ－２試作３号機・コックピット

（ケイ）

「ハッチ閉鎖……ＴＣ－ＯＳ、起動。……パーソナル・コード入力……、照合完了。
プラズマ・リアクター始動。……出力で固定。
各部アクチュエーター、チェック開始……各部問題無し。テスラ・ドライブ起動……背部バーニア、テスラ・ドライブ、チェック……問題無し。各固定武装チェック……問題無し」

ヒュッケバインのコックピットに搭乗したケイは、各部を起動し、マニュアルにしたがってチェックを行っていった。

（イルム）
『こちらモニター室。こちらでもチェックを行ったが、とくに問題は見当たらない』

コックピットとヘルメットに備え付けられたスピーカーから、イルムの声が聞こえてきた。

（ケイ）
「こちらケイ・シドウ、了解」

（イルム）
『モニター室、了解。これよりハンガーのロックを外す。ロックが外れたのを確認したら、横にあるウェポン・コンテナから《フォトンライフル》と《Ｍ９５０マシンガン》および、予備弾倉を機体に装備させろ』

（ケイ）
「了解」

とそこで、先ほどまで事務的な口調だったイルムが、ニヤニヤと

ケイに言った。

（イルム）
『間違えて、セーフティ外すなよ。マシンガンはともかく、ライフルの方には実戦用のエネルギーを搭載してんだから』

（ケイ）
「わかってますって」

ケイは苦笑し、そう答える。そして順調に装備をととのえていった。

（ケイ）
「こちらケイ・シドウ。武装完了」
（イルム）
『モニター室、了解。……それじゃ、前方の気密室に移動させる』

（ケイ）
「了解」

その直後、ガコンッ！　という音と共に、ヒュッケバインＭＫ－２が乗っている台が動きだし、前方にあるハッチの開いた気密室へと機体を移動させた。
そして機体が気密室に入りきると、ハッチがゆっくりと閉まる。

（職員）
『ハッチ閉鎖確認。人員の退避確認。気密、開始』

イルムとは違う声がそう言うと、気密室の照明が赤へとかわる。
それからゴーッ、という音がなり数秒後、

（職員）
『気密完了』

コックピットにあるモニターのひとつに目をやると、そこには『ＯＵＴＳＩＤＥ　ＣＯＮＤＩＯＮ／ＶＡＣＵＵＭ』――外と同じ、真空状態――と表示されていた。

（イルム）
『よしっ、外部ハッチを開け！　ケイ、ＭＫ－２を頼んだぞ！！』

（ケイ）
「わかりました！！　ケイ・シドウ、ヒュッケバインＭＫ－２発進します！！」

ケイは威勢よく宣言すると、ペダルを踏み込み、ヒュッケバインＭＫ－２を深遠の空へと飛び立たせる――！！

第2話　『バニシング・トルーパー』（後書き）

すみませんm（＿＿）m次から戦闘が始まりますので、それまでお待ちください。それから、主人公機がヒュッケバインということもあり、『あの力』を持っているなと考えたかも知れませんが、裏切らせてもらいました。まあ、Ｊもαに似ているところがあるので、こちらにさせてもらいました。あと、更新の方は仕事の関係と、何より携帯での投稿のため、遅れますがご了承ください。一応、５話目までは出来ているので、早めに発表したいと思います。最後に、こんな作者本位の趣味小説にお付き合いいただきありがとうございます。ご意見、ご感想ありましたら、是非とも書いていただければ、うれしいです。では。

第3話　『襲撃』（前書き）

お待たせしました！　やっと、戦闘シーンを描くことが出来ました。
では、お楽しみください！

第3話　『襲撃』

（ケイ）
「ぐっ……！　すごい加速だな！！」

瞬間的にかかるGと計器類に表示される数字を見て、ケイは驚く。
おそらくグラビコン・システムがなければ、あまりのGにブラックアウト（気絶）していただろう。
と、そこで通信が入る。

（ラーダ）
『ケイ、テスラ・ドライブを搭載したMK－2の機動性は、ゲシュペンストを上回ります。ですから、操縦はいつも以上に細かく……よろしいですね？』

（ケイ）
「はい、わかりました。ラーダさん」

ラーダのアドバイスに頷くと、繊細な操作でMK－2を操り、テストを行う場所へと向かった。

（イルム）
『よし、それじゃまずは、機動性のテストを行う。適当に動いてい

いぞ』

（ケイ）

「了解しました、イルム先輩」

イルムの言葉に頷くと、ケイはなめらかに手と足を動かし、スティックとペダルを操作する。

ケイの指示にしたがい、機体の制御を司るＴＣ－ＯＳ（タクティカル・サイバティクス・オペレーティング・システム）を介してヒュッケバインが動きだす。

地をはうように低空を飛んでいるかとおもうと、急上昇し、急降下。

推力を一点に集中して爆発的な加速をしたかとおもうと、急停止。

腕部と脚部に装備されたスラスターを併用し、素早く細かに動く。

ヒュッケバインの動きは、時に大胆に時に繊細で、まるで舞踏をおもわせる華麗なものだった。

それらの動きを5分ほど行った。

（ケイ）

（こいつ……かなりの機動性だな。……これなら……そこらの奴が撃つ弾なんて当たらないんじゃ……。

それに、グラビコン・システム……あれだけの機動をしたのに、それほどＧを感じなかった……）

ケイは、このヒュッケバインＭＫ－２の性能に驚嘆していた。

（イルム）
『それじゃ、次は模擬戦といくか』
（ケイ）
「はい！」

イルムの指示にケイは威勢よく頷く。

（ラーダ）
『それから、ケイ……『サイトロンシステム』を起動して。模擬戦で、システムが機体にどのように作用するかモニターをしたいから』

イルムにかわってラーダが通信をよこしてきた。

（ケイ）
「わかりました。……『サイトロンシステム』起動」
ラーダの指示にしたがい、スイッチのひとつを操作し『サイトロンシステム』を起動させる。

（ケイ）
（サイトロンシステム……いったいどんなシステムなんだろう……？）
義父がのこしたシステムに好奇心がそそられるケイ。そんなことを考えていると、イルムから通信が入った。

（イルム）
『システム起動を確認。モニターを開始する。……模擬戦の相手は、ＡＩ操作の量産型ゲシュペンストＭＫ－２だ。だが、ＡＩだからといって、油断はするなよ。モーションデータは『教導隊』のだからな』

（ケイ）
「『教導隊』っ！？」

イルムの言葉に驚くケイ。

それもそのはず。
教導隊とは、正式名称を『特殊戦技教導隊』といい、パーソナル・トルーパーの開発にともない軍内部でも選りすぐりのエースを集めた部隊である。
この部隊が存在しなければ、高性能のＴＣ－ＯＳは生まれなかっただろうし、ＰＴという人型機動兵器は日の目を見ることはなかっただろう、とまで言われているのだ。

ケイが驚くのも無理からぬものであった。

（イルム）
『なんだ、怖じ気づいたのか？』

どこか楽しむかのようにチャチャをいれるイルム。それにケイは、自分も笑ってこたえる。

（ケイ）
「まさか……楽しみが増えたな、と思っただけですよ」

（イルム）
『そーかい。なら、お手並み拝見といこうか？　状況を開始する！！』
イルムの言葉を合図に、月面にあるハッチから、がっちりした鎧

をブルーに塗装し、ウサギの耳のような大型センサーを搭載した機体――『ＲＰＴ－００７量産型ゲシュペンストＭＫ－２』が５機、それぞれ手にマシンガンを持ち、飛び出してきた。

（ケイ）
「了解！！」

気負いも恐れもない気迫の声を上げ、ケイは機体を５機のゲシュペンストに向け、バーニアを噴かせた。

「先手必勝っ！！」

数で劣るケイは、敵がフォーメーションを組み終わる前に攻撃をしかけた方がいいと判断。

ＭＫ－２の機動性を活かし、一気に距離を縮め、Ｍ９５０マシンガンの引き金を引く。
毎秒何十発ものペイント弾が尾を引き、５機のゲシュペンストに迫る。
しかし５機は素早く散開すると、間合いをとってフォーメーションを組んだ。

（ケイ）
「くっ……！」

ケイも各部のスラスター噴射させ旋回するが時すでにおそし、５機は２－３（前衛２機、後衛３機）の編隊を組み、ＭＫ－２へと向かってきた。
ケイは素早く前方の２機にマシンガンを向け、けん制の射撃を行

う。
しかし、その攻撃に怯むことなく2機は突撃してきた。
それも内1機は電光石火の踏み込みでＭＫ－２との距離を縮めていく。

（ケイ）
「はやいっ！？　だが……！！」

クロスレンジと判断したケイはビームソードを展開すると、突撃してくる敵機の間合いへと、自ら突入する。

（ケイ）
（データの元になったパイロットは、接近戦のプロフェッショナルか。思い切りのいい突撃をしてくる！！　が、しかし……！）

接近戦で必要なのは、技術でも素早さでもない。本当に必要なのは……。

（ケイ）
「気迫だぁっ！！」

このゲシュペンストのＡＩは確かに、パイロットのデータを元に踏み込みのスピードを再現していた。が、パイロットの『この一撃で決める』という想いまで、ＡＩは再現できていなかった。
だから、

（ケイ）
「破アアッ！！」
プラズマ光を放つゲシュペンストの左手――『ジェト・マグナム』をＭＫ－２は紙一重で躱し、ビームソードで胸部を下から上へ斬り

裂いた。
ビームソードのエネルギーは模擬戦用に出力を下げてあったので、本当に機体を斬り裂いてはいないが、『コックピット破壊』という判断をうけた敵機は、模擬戦のルールにしたがい機能を停止した。

（ケイ）
「よしっ！！　……っていってる場合じゃないかっ！」

喜んだのも束の間、前衛をつとめていたもう1機が、マシンガンを連射しながら接近してきた。

（ケイ）
「くっ！？」

その攻撃を何とか避けたケイは、すれ違い様にマシンガンの引き金を引き、ペイント弾を背部に撃ち込み、撃墜判定をもらう。
前衛2機の消失に、しかしパイロットがＡＩのためか浮き足立つこともなく、フォーメーションを再編し、他の3機が攻撃してきた。
3機による集中砲火。
普通であればヒュッケバインは『はちのす』になっていたことだろう――普通であれば。

（ケイ）
「Ｇ・ウォールッ！！」

ヒュッケバインＭＫ－２の周りの空間が歪み、襲いかかってくる弾丸を受け止め、運動エネルギーを０にする。

（ケイ）
「ウオオオオッ！！」

G・ウォールを展開したまま3機に接近、マシンガンをぶっ放す。

ダダダダダダッ！！

銃口からはき出されたペイント弾は、それぞれ頭部・胸部・背部に命中。

（ケイ）
「ソード、セット！！」

ＭＫ－２はテスラ・ドライブの出力を細かく調整し、３機の間を縫うように通り抜け、一太刀づつ打ち込み、撃破する。

（ケイ）
「はあっ、はあっ、はあっ……ふぅ」

（イルム）
『なかなかやるじゃないか、無傷で全機撃破だとは』

イルムから通信が入る。

（ケイ）
「いえ……ＡＩだから出来たことです。もし本人たちを相手にしていたら、ＭＫ－２に乗っていても負けていたでしょう……」

（イルム）
『謙遜……でもないな。その冷静な状況判断……シウン博士がテストパイロットにおすだけはあるな』

マオ・インダストリー本社　モニター室

（ケイ）
『いえ……ありがとうございます』

スピーカーからケイがそう言ってくるのを聞きながら、イルムは彼に届かないようにラーダに問いかける。

（イルム）
「例のシステムは機能しているか？」

（ラーダ）
「いえ……とくにこれといった反応はありません」

（イルム）
「そうか……『サイトロンシステム』とはいったい……」

顎に手をあて考え込むイルム。
しかしまったくわからなかった。

（イルム）
「まあ、いい。これから少しずつ調べていけば」

そう納得し、イルムはラーダにゲシュペンストの回収を指示すると、ケイに通信を送った。

（イルム）

「ケイ、今日のテストは終わりだ。戻ってこい」

ヒュッケバインＭＫ－２・コックピット

（ケイ）
「了解しました」

ゲシュペンストが出てきたハッチに戻っていくのを見守り、ケイはイルムの言葉に頷いて、ヒュッケバインを格納庫の方へ向かわせる。

だが、その時……。

ビーッ、ビーッ！！

（ケイ）
「んっ！？　接近警報っ！？」

異変に気づき、レーダーを確認する。レーダー画面には４つの赤い光点が、こちらにどんどん近づいてきている様子が映し出されていた。

（ケイ）
「いったい……」

ヒュッケバインの頭部を光点のある方向に向けるとそこには、３対の脚をもった物体が４体、こちらに向かってきていた。

（ケイ）
「なんだ、あれは……？」

おもわず疑問の声をあげるケイ。
それにこたえたのはイルムだった。

（イルム）
『あれは……バグズ！？』

（ケイ）
「バグズ……？」

イルムの言葉を繰り返すケイ。
同時にモニターの１つに『ＡＧＸ－０１バグズ』という表示が現れる。

（ケイ）
「……“虫”……？」

確かにいわれてみれば、その物体は虫のような形をしていた。

（イルム）
『こんなところまで現れるとは……っ！？
おいケイっ！！　お前はすぐに離脱しろ！！　そいつらは無人機でどうにかする！！』

（ケイ）
「いえ、無理そうです……」

そう答えるケイの瞳は、バグズと呼ばれる機体が、無人機の出てくるハッチを破壊している光景を見つめていた。

（イルム）
『……っ！？』

（ケイ）
「とにかく、こちらはこちらで何とかします！！」

ＴＣ－ＯＳの状態を《ノーマルモード》から《バトルモード》に切り替えながら、ケイはそうイルムに通信を送る。

（イルム）
『わかった！！　だが、無理はするなよ。そいつは対異星人用の切り札なんだからな！！』

（ケイ）
「わかってますって！！　ヒュッケバインＭＫ－２、戦闘へ突入する！！」

《Ｍ９５０マシンガン》をすて《フォトンライフル》をかまえ、ケイはバグたちへヒュッケバインを飛翔させる。

（ケイ）
（……あの機体、あきらかにジオンのものじゃない……かといって今地球の極東地域を騒がせてる地下勢力のものでもない……まさかアレが、ＥＯＴの……？）

敵機の独特のフォルムにそう推測するが、

（ケイ）
「まっ、考えても始まらないか！」

機体のデータベースに記録があるのなら、過去にどこかの部隊が交戦しているということ。
戻れば、なにか情報をえることが出来るはず……。ケイはそう判断し、４体のバグズとの戦いに神経を研ぎ澄ませる。

彼は知らない……これが、地球圏を……そして銀河全体を巻き込む戦乱の幕開けであることに……。

第3話　『襲撃』（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか？　感想やダメ出しがありましたら、是非教えていただけたら、幸いです。　また、ここで書くことでは無いかもしれませんが、補足を。　教導隊は、バンプレストオリジナルの設定です。『ＯＧｓ』でも活躍します。

メンバーは、隊長はカーウェイ・ラウ。隊員のカイ・キタムラ、テンペスト・ホーカー、ギリアム・イェーガー、エルザム・Ｖ・ブランシュタイン、ゼンガー・ゾンボルト。　もちろん、カイ、ギリアム、エルザム、ゼンガーはこの作品でも活躍しますので、登場するのをお楽しみにしていてください。

第４話　『転移』

なめらかな鋼鉄の肌と、三対の脚をもつその機体は、そのフォルムと動きから、どこか生物的な印象を受ける“バグズ”４体は、ゲシュペンストの発進ハッチを破壊すると、ケイの駆るヒュッケバインＭＫ－２へと襲いかかった。
４体は一斉に頭部の『顎』のようなところを展開し、衝撃波を放った。

（ケイ）
「くっ！？」

その攻撃をテスラ・ドライブと機体各部のスラスターを駆使し、回避する。

（ケイ）
「舐めるなっ！！」

すぐさまフォトンライフルを敵機に向け、トリガーを引く。

ダダダンッ！！

マズルフラッシュとともに飛びだしたエネルギー弾が、１体のバグズを粉々にうち砕く。

（ケイ）

「セーフティ解除！　行けっ、チャクラムッ！！」

それから間髪入れずにケイは、ＭＫ－２の左腕部に装備された『チャクラムシューター』を発射する。

高硬度の鋼糸につながれた円状の回転刃が、鋼糸を絡ませながらバグズに襲いかかる。

（ケイ）

「ハアアアッ！！」

そして、回転刃に切り刻まれるバグズをもう１体にぶつけ、フォトンライフルを放つ。

（ケイ）

「ラストッ！！」

残った１体は、テスラ・ドライブの爆発的な加速力を利用し、神速の速さで接近、ビームソードの一閃で撃破する。

（ケイ）

「よしっ！　……こちらＭＫ－２、ケイ・シドウ、敵機全機撃破」

ＭＫ－２の姿勢を制御しながら、ケイはモニター室に戦闘終了を告げる。だが、

（イルム）

『まだだっ！！』

イルムから予想外の答えがかえってきた。

（ケイ）
「えっ……、――！？」

レーダーを見ると、どこからともなく敵機を示す赤い光点がＭＫ－２を囲むように出現する。
それも、その数はどんどんと増えていった。

（ケイ）
「まだこんなに……」

ケイはその数にがく然とする。

（イルム）
『連合からの応援はまだ時間がかかる！　それまでなんとかもちこたえてくれ！！』

その通信は、彼をより一層不安にさせるものだった。

（ケイ）
「くそっ……だけど、無い物ねだりはできない……ならっ！！」

自らの心を奮い立たせるように声を張り上げると、レーダーを確認し、敵陣のもっとも薄いところに向かってＭＫ－２を突撃させた。

（ケイ）
「自分でどうにかするしかないっ！！」

テスラ・ドライブと背部バーニアを臨界ぎりぎりまで出力を上げ、敵陣に突入。
先手をとってフォトンライフルを連射、何体かのバグズを葬る。

（ケイ）
「斬り裂けっ！　チャクラムシューター！！」
左腕部を巧みに動かしチャクラムを操作、バグズの胴体を切り刻んでいく。

（ケイ）
「これでトドメだっ！！　……Ｇ・インパクト――っ！？」
バグズの集中するところにＭＫ－２最大の武器を放とうとした、その時、コックピットが衝撃でゆれた。

（ケイ）
「なっ、なんだっ！？」
すぐさま機体各部に設置されたセンサーを確認すると、他の場所から接近していた数体のバグズがＭＫ－２にしがみついていた。

（ケイ）
「くそっ、離れろっ！？」
機体を操作してもがくが、バグズたちを突き放すことが出来ない。それどころかバグズたちはその顎を展開し、衝撃波を放とうとしていた。
さすがのＭＫ－２も、このゼロ距離からの攻撃ではひとたまりもない。

（ケイ）
（俺は……死ぬのか……？）

この絶対絶命の危機に、ケイの脳裏に『死』という言葉がよぎる。

（ケイ）
「……けるな……」

だが、一瞬よぎった言葉に彼は恐怖するどころか、逆に、

（ケイ）
「ふざけるなぁーーっ！！」

感情を爆発させた。

（ケイ）
（死んでたまるか！　死んでたまるか！　……家族を置いて――）
「死んでたまるかっ！！」

その瞬間、

『サイトロンシステム……フルコネクト』

そんな電子音声が静かに響いた。

（ケイ）
「なっ……なんだ？」

いきなりの事態におもわず正気にもどるケイ。

『オルゴンエクストラクター……起動』

しかしそんな彼を気にすることなく、電子音声は次々と作業を進めて行く。

『シーカー、セット。座標固定……』

そして、

『オルゴンクラウド……発動』

その瞬間、ケイの乗るヒュッケバインＭＫ－２は光につつまれ、そして……忽然と姿を消した。

マオ・インダストリー本社　モニター室

（イルム）

「……消えた、だと……！？」

モニターに映し出された映像を見つめ、イルムは呆然と呟いた。

そう、消えたのだ。

バグズに取り付かれ、あと少しで攻撃を受けていたであろうヒュッケバインＭＫ－２が、突然、翠の光につつまれ消えたのだ。

（ラーダ）

「……、――っ！？　見てくださいっ！！」

同じく呆然としていたラーダだったが、モニターのひとつに表示された情報に気づき、イルムに声をかけた。

（イルム）
「なっ……」

そのモニター画面には、こう表示されていた。

――サイトロンシステム、フルコネクト――と……。

そして、そんな不可解な現象を、イルムたち以外に見ていた者がいた。

それも、ここと違う次元から。

「歯車のひとつが動いたか……」

普通なら、絶対に見ることの出来ない場所で一部始終を見つめ、彼は呟く。

「うまくいけば、新たなる剣たちを集めることが出来るか。――よ、待っていろ。
人の心が、人の想いが、お前の思うとおりにならないことを……
そうだろ、イングラム……」

それは……虚空の代行者の名をもつ少年の……運命への宣戦布告であった。

第４話　『転移』（後書き）

この話までがプロローグになります。ここから話は『天使編』になりますので、お楽しみにしてください。ちなみに、謎の声は、これからもたびたび出てきます。重要人物ですので、注目してください。
では。

番外編　メカニック設定（前書き）

これは、第４話までに出てきたマシンの設定です。なお、解説でゲームの文章を引用していますが、すべての権利はバンプレスト、バンダイ、その他の権利者に帰属します。ですので、訴えないでくださいね（笑）

番外編　メカニック設定

量産型ゲシュペンストＭＫ－２

型式番号：ＲＰＴ－００７
全高：２１．２ｍ
重量：６９．１ｔ

形状：全体的に丸みを帯びた輪郭で構成されており、初のＰＴ（パーソナル・トルーパー）ということもありがっちりした体型をしている。　腕部は、左右で形が違い、左側には杭のような、三本の突起がある。人間の『指』にあたるところは、相当数のモーターを使用し、人間の指と同じ動きができるように製作している。
頭部は、ヘルメットのような丸みを帯びたパーツをしようしており、人間と同じ一対のデュアルセンサーをサングラスのようなバイザーで覆っている。
そして、左右の側頭部には、ウサギの耳をおもわせる大型センサーが存在する。機体色は、ブルーが基本だが、若干のバリエーションがある。

解説：人類初のパーソナル・トルーパー、ゲシュペンストの後継機、ゲシュペンストＭＫ－２の量産移行型。
性能は量産試作型のゲシュペンストＭＫ－２（タイプＲ）とほぼ同じだが、センサー類が強化され、左腕にはプラズマカッター（ゲシュペンスト用のエネルギーサーベル）の代わりに、格闘戦用のプラズマステーク（ジェット・マグナム：ステークにプラズマをまとわせ、敵機を殴る、ゲシュペンストの必殺技）が装備されている。

対異星人用の人型機動兵器として開発され、量産が開始されてあるが、連合のある派閥からの横やりのため、生産が遅れている。

ヒュッケバインＭＫ－２

型式番号：ＲＴＸ－０１０－３

全高：２０．８ｍ
重量：５２．０ｔ

形状：ゲシュペンストシリーズとは違い、全体的に鋭角的なフォルムでまとめられ、スマートな機体。
機体の基本構成はゲシュペンストと同じだが、左腕の肘のところに、チャクラムシューターという武器の格納・発射部が存在する。
頭部は連合の象徴的モビルスーツ『ガンダム』を彷彿とさせる鋭い一対のデュアルセンサーとＶ字型のブレードアンテナ、まげのようなメインカメラ部で構成されている。背部には、左右独立のバーニアを装備している。機体色はネイビーブルーを基調にしている。

解説：初のＥＯＴ搭載型ＰＴ、ＲＴＸ－００８／００９ヒュッケバインの改良型・量産試作機。
暴走事故を引き起こしたヒュッケバインのブラックホールエンジンは採用されておらず、関節部や内部フレームなどもゲシュペンスト

ＭＫ－２のものが流用されているが、動力源は新型のプラズマ・リアクターとなっている。
三機開発され、それらにはＥＯＴを応用したグラビコン・システムやＧ・インパクトキャノンが装備されている。
量産化を前提とした低コスト化が図られているが、ヒュッケバインの基本性能は受け継がれている。

主人公が搭乗する機体は、試作３号機で、推進装置にテスラ・ドライブを、
補助システムに『サイトロンシステム』、装甲材にゾル・オリハルコニウムを特別に使用している。

※ゲーム本編では、Ｇ・インパクトキャノンは射出式の武器だが、ストーリーの都合上、機体背部と腰部後部に分解した状態で搭載されている。
それが、使用時に変形、合体しキャノン砲になる。

メギロート

コードネーム：ＡＧＸ－１
「バグズ」

全高：１０．４ｍ
重量：３．８ｔ

形状：三対の脚に羽のようなパーツ、そして頭部の形状から『虫』のような姿に見える。

解説：人類初の外宇宙探査船『ヒリュウ』が冥王星外宙域で遭遇した謎の機体。
その形状から、地球外知的生命体の兵器……それも偵察機と思われる。

ヒリュウ襲撃後、地球圏各地に出没するも目的はいまだ不明で、その解明が急がれている。
ちなみに『バグズ』というコードネームは、ゲシュペンストＭＫ－２タイプＲのテスト中、襲撃されたエルザム・Ｖ・ブランシュタインが命名した。

番外編　メカニック設定（後書き）

今後もたびたび入れようと思いますので、説明して欲しいものがありましたら、教えてください。

第5話　『月の天使達（1）』（前書き）

遅くなってしまってすみませんm（＿＿）m仕事が忙しく、更新が遅れてしまいました。

第5話　『月の天使達（1）』

人類が星々の海を行き来するようになってから、どれだけの時が流れたのでしょう……。

高度な文明が数多の星系で花開き、人々は繁栄を享受していました。

ところが、その文明にもやがて危機がおとずれました。

後に『時空震（クロノ・クウェイク）』と呼ばれる、未曾有の災厄が宇宙を襲ったのです。

星々をつないでいた銀河ネットワークは崩壊し、各星系は相互のつながりを経たれ、孤立しました。

混乱のさなか、恒星間航法などのすぐれた技術も失われ、文明は衰退していきました……。

その後、小国のひとつだったトランスバール皇国に、巨大な人工天体『白き月』が出現しました。

『白き月』の中には、恒星間航法をはじめとする数多くの失われた技術……ロストテクノロジーが眠っていました。

これにより、人類は再び宇宙へこぎ出す力を得たのです。

トランスバール皇国はロストテクノロジーの恩恵を受けて版図を広げ、数百年の長きに渡る平和を築き上げました。

しかし……。

トランスバール皇国歴４１２年、その平和は突如として終わりを告げました。

いずこからともなく現れた謎の武装勢力が、皇国に反旗を翻した

のです。
強力な艦隊が持つ武装勢力は、破竹の勢いで中央へと攻め上がり、ついにはトランスバール本星を包囲するという事態に発展しました……。

皇国の辺境に位置する、クリオム星系……。
果てしない宇宙に浮かぶ3隻の宇宙船。
もうひとつの物語が、ここから始まります……。

トランスバール皇国軍第2方面軍所属クリオム星系駐留艦隊旗艦
艦長室

適度に整えられた艦長室。そこに備え付けられたデスクチェアに座った青年は、いつもはのほほんとした笑みを浮かべている顔を曇らせ、デスクに頬づえをついていた。

（青年）
「まさか、いきなりクーデターが起きるなんて。トランスバール本星はどうなってるんだ？
皇王ジェラール陛下はご無事なんだろうか？
『白き月』におられる“月の聖母”シャトヤーン様は……」

どうやら、青年が目を通していたものには、祖国の変事が書き記されていたようだ。
ちょうどその時、部屋の扉が開き、銀髪に眼帯をつけた長身の青

年が入ってきた。
しかし青年はそれを気にもとめずに――あるいは気づいていないのか――呟く。

（青年）
「情報収集をしようにも、第2方面軍の司令部とも連絡がとれない。だからといって、たかだか駐留艦隊の司令官の身としては、勝手に動くことも出来ない……」

そんな青年に、銀髪の青年は声をかける。

（銀髪の青年）
「……おい、タクト」

しかし、名前を呼ばれたにもかかわらず、タクトという名の青年は、

（タクト）
「まあ、こんな辺境にまでクーデター勢力がやって来るなんてことは、当分はないだろうし、今はのんびり待機していよう……」

なんて、マイペースな答えを出していた。これに無視された銀髪の青年は、先ほどよりも声をはり上げ、もう一度呼びかけた。

（銀髪の青年）
「タクト！　タクト・マイヤーズ司令！　聞いてんのか！？」

というか怒鳴った。
普通の人ならば、びっくりしてしまう声量で怒鳴られながらも、青年はおどろくことなく銀髪の青年に体を向けた。

（タクト）
「そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよ、レスター」
明るい声音でそう言い、タクトは銀髪の青年――レスターに笑いかけた。笑みを向けられたレスターは呆れかえる。

（レスター）
「こんな非常時に、艦長室にもどって何をのんびりとしてるんだ。いくら待機だといっても、艦隊司令官ともあろう者がブリッジから抜け出すなんて緊張感がなさすぎだ」
だが、レスターの嫌味を右から左へ受け流し、

（タクト）
「心外だな。みんなの心を和ませようとして、いつも通りに振る舞ってただけなんだけどな」

（レスター）
「そんなことで和む状況か、これが？　クーデターが起きたんだぞ。はやい話が、戦争だ！　……つーか、いつも通りからしておかしいんだよ、お前は」
またもレスターの鋭いツッコミを受けることになる。しかし、そんな嫌味にかるく苦笑し、

（タクト）
「わかってるって。だけど、ここでオレたちがじたばたしても、状況がかわるわけじゃないだろう？
それに、オレたち軍人でも、実戦経験のある者はほとんどいない

んだ。クーデターだの戦争だのって言われてもねぇ……」

そうなのだ。トランスバール皇国軍は、ここ数十年戦争らしい戦争は一度もしたことがなかった。

それもそうだ。古代文明を滅ぼした大災厄『クロノ・クウェイク』によって、各星系の技術力は衰退……。

そんな中でトランスバール皇国は、本星の周辺に偶然現れた人工天体『白き月』によって、技術力を回復させる。

それにより他の星系の技術力を数段上回ることが出来た。

結局のところ、戦争は技術力によって左右される。

ひとつの星を一周するのに何ヶ月もかかる水上船と宇宙戦艦とでは、勝負にもならない。だから、戦争になる前に相手が負けを認めてくれる。

そんなことがここ数十年続いたのだ。戦争したくてもできないのだ。

……不謹慎な表現ではあるが。

ただ一年ほど前、トランスバールに匹敵する技術力をもつ文明と、ある辺境艦隊が接触したという報告があったが、それはまた別の話である。

（レスター）

「そりゃそうだが……お前は司令官なんだから、すこしはシャキッとしろ」

レスターの容赦ないツッコミに、

逆にタクトは満面の笑みを浮かべた。

（タクト）

「オレがとやかく言わなくても、みんなが自分から情報収集にあた

っているんだから、いいじゃないか。
それにレスター・クールダラスという、我が友にして有能な副司令もいるんだ。お前を信頼していればこそ、落ち着いていられる」

これにレスターはまたひとつため息をはいた。

（レスター）
「まったく……。都合のいいときだけ、親友あつかいしやがって」

そう、タクトの言葉通り、彼ら2人はただの司令・副司令という間柄だけではなかった。
タクトとレスターは、士官学校時代からの縁である。ちなみにその士官学校での成績は、レスターが首席で、タクトは下から数えた方が早い位置にいた。
しかし、そんな成績とはいえ、タクトはトランスバール皇国でも有数な名門貴族――三男だが――出自であった。
母国トランスバール皇国が、皇王制をとっている以上、たとえ成績がよかろうと、平民と貴族では役職に差が出るのは当たり前。
そのため、タクトは大佐、レスターは少佐ということになっていた。
普通であれば、そんな状態で友情なんぞ生まれるわけがないのだが、タクトはもちろん、レスターもどこか変わり者で、たがいの階級を気にすることなく『親友』――レスターいわく『腐れ縁』――でいられるのだ。

（タクト）
「まあ、いざというときが来たら、オレも全力をつくすさ。
そのためにも、今は心ゆくまでのんびりさせてもらうよ」

あいもかわらずタクトはのほほんと告げた。

（レスター）
「ふぅ……。そのお気楽な性格がうらやましいよ」

全然思ってない呆れ顔でレスターは力なくこたえた。
その時、タクトの前にあるモニターの文字が変化した。

（タクト）
「ん……？　ふむふむ……。……むぅ」

画面をのぞきこんだタクトは、文字を読み、顔をくもらせた。

（レスター）
「どうした、タクト？」

（タクト）
「新しい情報だ……まだ、未確認のものだけど……どうやら、情勢は近衛軍が不利みたいだね……」

軽く沈んだタクトの言葉に、レスターは隻眼を見開き驚きの声を上げた。

（レスター）
「近衛軍がっ！？」

近衛軍。
その名の通り、トランスバール皇王を守護する部隊……。それはすなわち、皇王の住まう皇宮のあるトランスバール本星を護る部隊

で、皇国内でもトップの力をもつ。
その近衛軍が窮地にたたされているとなると……。

（レスター）
「未確認情報とはいえ……クーデター勢力の力はそれほどということか……」

レスターの呟きに、タクトも同意する。

（タクト）
「だろうね。……だけどそれだけじゃない。クーデター勢力を率いてる人物は、皇国の内情に詳しいからね」

何もかもが不明のクーデター勢力だが、実は、当初から一つだけわかっていた情報があった。それは何を隠そう、クーデター首謀者の名。それは……。

（レスター）
「ああ……。エオニア皇子、か。まさか生きていたとは……」

首謀者の名を呟く副官の言葉に、タクトはやんわりと訂正をいれる。

（タクト）
「皇子じゃないぞ、レスター。
エオニアは5年前に皇国外に追放されたんだ。その時に皇族の地位もはく奪されている」

（レスター）
「ああ、そうだったな。

生きていたのも驚きだが、まさか軍勢を従えて反乱を起こすとは……」

レスターの言葉に、タクトもため息をついて頷く。

（タクト）
「人間、どんな場所でも生きていけるってことはわかったけど、わざわざ宣伝して回らなくてもいいのにね」

その言葉は、緊張感にかけるものだが、彼の言う通り、エオニアは堂々と己が名をあげて、皇国に侵攻してきたのだ。

（レスター）
「そんなこと言ってる場合か。こうしている間にも、エオニアは――」

ビーッ、ビーッ、ビーッ！

緊張感のないセリフを吐く司令官にレスターがつっこもうとしたその時、けたたましいサイレンが艦内に鳴り響いた。

（タクト）
「なんだ？　この警報は？」

いきなりの事態におもわず呟くタクト。その時、レスターにブリッジから通信が入った。

（オペレーター1）
『クールダラス副司令、大変ですっ！！』

（レスター）
「どうした、何が起こっている？　状況を正確に報告せよ」

レスターの冷静な一喝に、通信を送ってきたクルーはいくぶん落ち着きをとり戻し、報告する。

（オペレーター１）
『報告します。……周囲に展開していた無人哨戒機が、所属不明機を捕捉しました』

（レスター）
「何？　わかった。マイヤーズ司令と共にすぐにブリッジに向かう。それまで警戒を怠るな」

（オペレーター１）
『了解しました！』

そうして通信が終わる。それを見届け、タクトは苦笑した。

（タクト）
「この艦隊の責任者って、オレじゃなかったけ？」

その質問に、レスターは醒めた声音でこたえた。

（レスター）
「そう思うんなら、もっとちゃんと仕事しろ。……たくっ、本気になりゃ近衛軍の司令官にだってなれるくせに……」

（タクト）

「買いかぶりだよ……。それよりはやくブリッジに行こうか」

レスターの言葉に先ほどとは違う苦笑を浮かべ、タクトは副司令をともない、ブリッジへと向かった。

第5話　『月の天使達（1）』（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？　続きははやく書きたいと思いますのでお待ちください。それから、この話から、ゲームのテキストを引用していますが、それらはすべて、原作者に帰属します。あと、感想、評価を書いていただけると幸いです。

第5話　『月の天使達（2）』（前書き）

遅くなり、すいませんm（＿＿）m

第5話　『月の天使達（2）』

クリオム星系駐留艦隊旗艦　ブリッジ

（オペレーター1）
「お待ちしておりました、クールダラス副司令、マイヤーズ司令！」

ブリッジの扉が開くと同時に、索敵担当のオペレーターが二人に敬礼していた。
先にレスターの名を呼ばれたにもかかわらず、何事もなかったようにタクトは軽く返礼し、ブリッジの一番上にある艦長席に腰掛けた。

（レスター）
「状況を報告せよ」

タクトの脇に立ったレスターはオペレーターに命令する。

（オペレーター1）
「はっ！　先ほど、艦隊前方に展開していた無人哨戒機が、急速に接近する所属不明の戦闘機らしきものを3機、捕捉しました」

オペレーターはうわずった声でそう報告した。

（タクト）
「所属不明……」

オペレーターは報告を続ける。

（オペレーター1）
「さらに戦闘機の後方に、多数の艦影をとらえました！
無人哨戒機からの情報によると、戦闘機と艦隊は、まっすぐこちらへ向かってきているようです」

と、そこで持ち場にいたもう一人の索敵担当が声を上げた。

（オペレーター2）
「今、艦のレーダーでも確認しました。先行する3機は、大型の戦闘機のようですね」

それらの報告を聞き、レスターは最悪の予測を口にする。

（レスター）
「何者だ……？　まさか、クーデター勢力か？」

レスターとしては当たり前にでたセリフだったが、報告をしていたオペレーターはひどく驚いた。

（オペレーター1）
「クーデター勢力！？　それじゃ、こちらに攻撃してくるかもしれないんですか！？
あれだけの数の艦隊や戦闘機に攻撃されたら、我々の艦隊なんかひとたまりもありませんよ！」

狼狽した声に内心呆れながら、レスターはタクトに問いかけた。

（レスター）

「この戦闘機、すさまじいスピードだな……。もうすぐこちらの交戦圏内に入るぞ。
……どうする、タクト？」

（タクト）
「……」

それに、タクトはメインモニターに映るレーダー画面を見つめ、沈黙で答える。
そのレーダー画面には、艦隊前方にいる艦隊と戦闘機が種類を別けて光点で表示されていた。
先行する3機の戦闘機は、皇国で広く使用されている艦載機を凌ぐスピードでこちらに接近していた。

（タクト）
（……普通に考えれば、艦隊と戦闘機は同じ部隊……だけど、何かが引っかかる）

確証のない直感であったが、タクトはこの3機が敵ではないのでは？　と考えていた。
と、そこで沈黙に耐えかねたオペレーターが怯えを含んだ声を上げた。

（オペレーター1）
「このままじゃ、やられちゃいますよ！　どうするんですか、マイヤーズ司令！？」

普通の艦隊司令官ならば、階級をたてに黙らせるのだが、タクトは内心苦笑するだけで何も言わなかった。

（タクト）
（……これ以上は、士気にかかわるか……）

タクトは立ち上がり、司令官として命令を発した。

（タクト）
「全艦、第一種戦闘配備に移行せよ。警告に従わない場合は、攻撃もやむなしとする！」

（レスター）
「了解。全艦に第一種戦闘配備を通達！」

副官であるレスターが、タクトの命令を力強い声で復唱する。
その命令にブリッジがあわただしくなる。

（オペレーター1）
「りょ、了解。ですが、自分は実戦なんて初めてなんです。う、うまくいくでしょうか……」

報告をしていたオペレーターも持ち場に戻りながら、不安げな声音でぽつりともらした。

（タクト）
「うまくやるしかないだろ。オレだってまだ死にたくはないんだ」

呟くタクトにレスターも頷き、

（レスター）
「同感だが……何か策はあるのか？　どう考えても、ただの戦闘機じゃなさそうだぞ」

副官の問いに、タクトはあえて自分の直感について語らずにこう返す。

（タクト）
「まあ、なるようになるさ」

（オペレーター1）
「そ、そんなぁ！」

タクトのあまりに緊張感のないセリフに、おもわず声を上げるオペレーター。

（タクト）
「とにかく戦闘準備だ。状況はどうなっている」

タクトにせかされ、急いで持ち場にもどるオペレーター。そしてその相方はタクトの問いに、少し慌てながらも状況を報告する。

（オペレーター2）
「あ、はい。えーと……未確認機の映像、来ました！　メインモニターに出します！」

オペレーターは、メインモニターに光学センサーが捉えた『未確認戦闘機』の映像を表示した。
そこには、高速で編隊を組む、3機の戦闘機が映っていた。
その武装、カラーリングはそれぞれ違っていたが、
基本フレームは共通のようで系列機であることが映像で推測することが出来る。
そしてなによりタクトとレスターの目を引いたのは、3機にそれ

ぞれ描かれたあるひとつの『紋章』であった。
力強くひろげられた翼と剣を意匠化した、まるで天空をその白き翼で駆け抜ける“戦乙女”のような『紋章』。

（レスター）
「あの機体に描かれていた紋章……。どこかで見たことが……」

レスターの言葉にタクトも頷き、命令を出す。

（タクト）
「所属の照合を急いでくれ。あれは……どこかで……」

呟きながら、彼は先ほど感じた直感の信頼度を増した。
その時、通信担当のオペレーターが声を上げた。

（オペレーター3）
「マイヤーズ司令！　先行する大型戦闘機から、緊急通信です！」

（タクト）
「戦闘機から？　……よし、回線をつないでくれ」

もしかすると、直感が確信に変わるかもしれない……。

そう考えたタクトは通信オペレーターにそう指示を出す。それに従い、オペレーターが回線つないだ瞬間、彼の直感はいろいろな意味で的中し、外れた。

（？？？）
『すみません、ちょっとお聞きしてもよろしいですか？』

メインモニターに映し出された、ピンクの髪にふたつの花を髪飾りにした女の子が、あまりに場違いな第一声を発した。

（タクト）
「はい……？」

あまりにも予想外の言葉に、タクトもそんな声しか出せなかった。

（ピンクの女の子）
『そちらは、クリオム星系駐留艦隊で間違いありませんでしょうか？』

（タクト）
「間違い、ありませんが？」

完全に相手に主導権を握られ、タクトはそんな反応しかできなかった。

（ピンクの女の子）
『それじゃ、タクト・マイヤーズ司令官ってかたはいらっしゃいますか？』

（タクト）
「マイヤーズはオレだが……君はいったい誰なんだ？　なぜオレの名を知っている？」

（ピンクの女の子）
『あ、ごめんなさい。あたし――』

タクトの問いかけに女の子が答えようとした、その時、

ドカーンッ！！

（ピンクの女の子）
『きゃ～～っ！』

爆発音がスピーカーから漏れ、モニターに映る女の子の身体が思いっきり揺れた。

（オペレーター2）
「大型戦闘機、被弾！　後続の艦隊から、攻撃を受けているようです！」

（レスター）
「なに？　後ろの艦隊とは同じ部隊じゃないのか？」

索敵担当の報告に、レスターは疑問の声を上げる。

（ピンクの女の子）
『こんなところに敵がいるなんて情報、聞いてないのにぃ。どうしてこうなるの～』

女の子は可愛らしい声でそう困惑の悲鳴をあげ、タクトはそこに含まれた『敵』という言葉に気付き、

（タクト）
「敵……？　ねぇ君、どういうことなんだ？」

しかし彼の質問を聞くことなく女の子は、機体に降り注ぐ艦隊の攻撃に、

（ピンクの女の子）
『きゃ～～っ！
また撃たれたぁ～！　きゃ～っ！　きゃ～っ！　お願い、助けてくださいマイヤーズ司令～！』

奇声をあげ、タクトに助けを求めてきた。

（レスター）
「攻撃受けて、きゃ～きゃ～言ってる……。なんだ、こいつは？
追われてるのか？」

死の危険が迫っているにもかかわらず、どこかまぬけな悲鳴に、レスターは呆れてしまう。

（タクト）
「さあ……。えーと、君、落ち着いて。まずは事情を……」

レスターの疑問に首を傾げながら、タクトはとにかく女の子から情報を聞き出そうと声をかけた。だが、
（？？？）
『何をごちゃごちゃ言ってんのよ！』

突然通信に割り込んだ、金髪の勝ち気そうな女の子が怒鳴りこんできた。

（タクト）
「うわっ！？　なんだ、いきなり！」

驚くタクトに目もくれず、
女の子はたたみかける。

（金髪の女の子）
『女の子が困ってるのよ？　つべこべ言わずに助けなさいよ！　タクト・マイヤーズ！』

その女の子も、タクトの名を呼んだ。

（タクト）
「この子も、オレの名前を知ってる……」
タクトのそんな呟きを無視して、金髪の女の子はピンクの髪の女の子につっこんだ。

（ランファ）　『ミルフィー！
アンタもいつまでもきゃ～きゃ～言ってないで！　みっともないじゃないの！』
ミルフィーと呼ばれた女の子はそれに、大きな瞳に涙をにじませ、

（ミルフィー）
『だってランファ、こわいんだも～ん。あたし、もう逃げるぅ～！』

この泣きの入ったパイロットとして後ろ向きなこたえに、ランファと呼ばれた金髪の女の子はわめいた。

（ランファ）
『えーい！　紋章機の能力を、つまんない方向に使ってんじゃなーいっ！』

そのわめきに含まれたキーワードに、レスターとタクトの脳裏に先ほど見たあの『紋章』がうかんだ。

（レスター）
「何だと……？　今、なんて言った？」
（タクト）
「……紋章機……？」

その二人の呟きに気づくことなく、ランファはもう一人の戦闘機パイロットに話をふっていた。

（ランファ）
『フォルテさーん！　フォルテさんからも、ミルフィーに何とか言ってくださいよ！』

これに三人目の人物は通信回線をつないだ。

『わかった、わかった。ランファもミルフィーも、少し落ち着きなって。騒ぐのもいいけど、あんたたち。ここに来た目的、忘れてやしないかい？』

ハスキーボイスで二人をさとしたのは、たわわな胸を強調させた刺激的な服を着込んだ、赤毛の女性であった。

（ランファ）
『アタシは忘れてなんかいませんよ。この大ボケ天然娘と違ってねっ！』

フォルテという女性に言われ、ランファは憮然と反論する。

それにミルフィーは首を傾げ、

（ミルフィー）
『ねぇランファ、それって誰のこと？　ここにはあたしとランファとフォルテさんしかいないけど？』
（ランファ）
『そーいうところが大ボケだって言ってんのよ！』

またも始めるボケとツッコミの口論。これ以上は歯止めがきかなくなると判断したフォルテは、

（フォルテ）
『はいはい、漫才はそこまで。後ろから敵がきてるんだから、そんなことしてる場合じゃないだろ？』

口論を強制終了させた。
ここで今までの話についていけず、沈黙していたタクトが控えめに疑問の声をあげた。

（タクト）
「えーと……ちょっといいかな？　話がみえないんだけど……」

タクトの声に気づいたフォルテは彼に目をやり、

（フォルテ）
『ああ、話の主役をほったらかしにして。あたしたちは、お前さんにようがあって来たのさ。タクト・マイヤーズ司令官どの』

（タクト）
「オ、オレに……？　いったい何のことだ？」

フォルテの言葉にわけわからずうなるタクト。
と、彼女たちの機体の照合を行っていたオペレーターが、驚きの声で報告をよこした。

（オペレーター１）
「マイヤーズ司令！　戦闘機の照合ができました！
あの３機の所属は『白き月』の近衛隊。ムーンエンジェル隊の紋章機です！
前方よりＧＡ００１・ラッキースター！　ＧＡ００２・カンフーファイター！　ＧＡ００４・ハッピートリガー！」

その報告にタクトとレスターは驚愕と困惑の混ざりあった声をあげた。

（タクト）
「ムーンエンジェル隊……紋章機だって？」
（レスター）
「紋章機といえば、ロストテクノロジーの結晶……宇宙最強とあだ名される機体だぞ。実物を見るのは初めてだ……！　だがふだんは『白き月』の警護にあたっているばずのムーンエンジェル隊がなぜここに……？」
（タクト）
「直接、聞いてみるのが手っ取り早いよ。君たち……えーと、紋章機のパイロット！　なぜエンジェル隊が、こんな辺境にいるんだ？
追いかけてくる艦隊は、いったい何者だ！？　それに……どうしてオレの名前を知っている！！」

この問いに、ちょっと混乱したミルフィーが、

（ミルフィー）
『いっぺんに、あれこれ聞かないでくださーい』

苛立ちながらランファが、

（ランファ）
『アタシたちが何者かわかったんなら、さっさと手をかしなさいよ！』

そして、余裕のある表情でフォルテが、

（フォルテ）
『そうそう、話は後。とりあえず敵を片付けるのを手伝ってもらおうか』

そう締めくくった。
いきなりの共闘宣言に、かるく困った顔でタクトは尋ねる。

（タクト）
「手伝うって……あの艦隊と戦えっていうのか？」

そこで判断材料としてオペレーターが報告をよこした。

（オペレーター2）
「あの艦隊、形状は皇国軍と同型ばかりですが、識別信号を出していません。皇国軍ではないようです」
（レスター）
「そっちの艦隊と交信はできるか？」

通信担当はこの問いに首を横に振り、

（オペレーター3）
「だめです。さっきから呼び出していますが、応答ありません！」

それらの情報に、タクトはある答えを出した。

（タクト）
「皇国軍以外で軍艦をもっているとなると……。やっぱりあの艦隊は、うわさのクーデター勢力のものかな？」

それにレスターが反論する。

（レスター）
「バカな！　こんな辺境宙域にまで……！」

（タクト）
「信じられなくても、これは事実だ。
こんな辺境宙域に、天下の紋章機が現れたのもホントなら……正体不明の艦隊が多数、迫っているのもホントってわけだ。
だったら、取るべき道は、ひとつしかないだろう」

そう言ってレスターを落ち着かせるタクト。言われ冷静になったレスターは尋ねる。

（レスター）
「どうするつもりだ、タクト」

副官の問いに、

（タクト）
「それは……」

タクトは一瞬口をつぐみ、

（……何を迷う必要がある？　生き残るための道はひとつしかないじゃないか）

メインモニターを正面に見据え、こう宣言した。

（タクト）
「エンジェル隊のみんな！　タクト・マイヤーズ、所属不明艦隊の撃退に手を貸そう！」

その言葉にミルフィーは満面の笑みを浮かべ、

（ミルフィー）
『ありがとうございます！』
（ランファ）
『決めるのが遅いわよ』

ランファはすました顔でそう言った。

（レスター）
「おい、タクト！」

いきなりのことに驚きの声をあげるレスター。それにタクトはいつもののほほんとした笑みを浮かべおどけた調子で、

（タクト）
「女の子が、あやしいヤツらに追いかけられてるんだぞ？
守ってあげなきゃ、男がすたるよ」

その言葉に我が意を得たり、といった表情をフォルテはし、

（フォルテ）
『よく言った！　女の頼みのひとつも聞けない男に、皇国の明日は任せられないからね』

意味深な台詞を口にする。タクトは、

（タクト）
「え？　皇国の明日？」

疑問符を浮かべるが、彼女はそれに答えず、

（フォルテ）
『それじゃ、話もまとまっところで、自己紹介といこうかね。ミルフィー、あんたからおやり』

フォルテの提案にピンクの髪の女の子……ミルフィーはモニター越しにタクトに元気よくあいさつした。

（ミルフィー）
『は……はい！　ミルフィーユ・桜葉です！　ラッキースターのパイロットです！　精いっぱいがんばります！』

つづいて、金髪の女の子……ランファがちょっと不機嫌そうな声で、

（ランファ）
『蘭花（ランファ）・フランボアーズ。カンフーファイターのパイロットよ。たのむからヘンな指揮をしないでよ』

そして最後に赤毛の女性……フォルテが、どこかおもしろそうに、

（フォルテ）
『そしてあたしが、フォルテ・シュトーレン。ハッピートリガーのパイロットさ。よろしく頼むよ、マイヤーズ大佐』

そう締めくくった。
（タクト）
「……階級まで知られてる……」

フォルテの言った『大佐』に、タクトはかるく驚く。
彼の呟きに、フォルテはニヤリとイタズラっぽく笑い、問いかけた。

（フォルテ）
『気になる？　あたしたちが、お前さんのことを知ってるそのワケが』

しかし彼は首をかるく横に振った。

（タクト）
「後で聞くことにするよ。それで何をすればいいのかな？」

彼のこの答えに、彼女はすこしきょとんとした表情をした。

（フォルテ）
『おや、意外に仕事一筋だね』
（タクト）
「大勢の敵が、交戦圏内のすぐそばに迫っているときだけは、好奇心より職務を優先させることにしてるんだ」

そして視線だけで、彼はフォルテにこういった。

（それに……試してるんだろ、オレを……。命をあずけるに値するかどうかを……）

彼の視線の意図を理解したフォルテはほほ笑み、

（フォルテ）
『はいはい。
それじゃこちらもお仕事モードに入るとするよ』

フォルテのその言葉によって、ここにタクト・マイヤーズの、銀河の命運を賭けた永き戦いの幕が開けた。

第5話　『月の天使達（3）』

（フォルテ）
『それじゃ、マイヤーズ司令、お前さんにはあたしたちエンジェル隊の指揮をとってもらおうか？』

フォルテの言葉にタクトは頷く。

（タクト）
「わかった……それじゃ、エンジェル隊とのデータリンクを――」
（フォルテ）
『ちょっと待った……！　紋章機は特別な情報リンクシステムを利用していてね。それを今からそちらに送るから、インストールしてくれ』

タクトの指示をさえぎり、
フォルテはそう言ってシステムのインストールソフトを送信してきた。そのソフトをインストールするよう、タクトは部下に指示し、彼女にちらりと目線を送った。

（……もしかすると、ウィルスかもしれない……それでも使うかどうか……。本当に自分たちを信頼しているのかどうかを調べてるのかな？）

彼の目線に気づいたフォルテはしれっとした顔で、

（さあ？　なんのことやら）

そんな言葉にならない会話が二人の間でかわされた直後、

（オペレーター1）

「高速データリンクシステム、インストール終了！　同時に紋章機3機の登録を完了しました」

（タクト）

「了解した。……レスター、敵の分析は？」

オペレーターの報告に頷き、タクトはレスターに振り向かずに尋ねた。これにレスターはあうんの呼吸で報告する。

（レスター）

「敵は、スパード級駆逐艦6隻にバーメル級巡洋艦が3隻だ。フォーメーションは通常のデルタモードで、三方からオレたちの艦隊を囲むように展開している」

艦長席にそなえつけられたコンソール画面に無人哨戒機、レーダーから得られた情報の簡略図が表示される。

（タクト）

「ふむ……普通だったら、包囲されて殲滅させられるね」

（ランファ）

『なに、もうあきらめたの、アンタ？』

タクトの言に、ランファが期待はずれとも言わんばかりに、不機嫌な声でそういってきた。

そんな辛らつな言葉に、しかしタクトは飄々とした表情でこう言

った。

（タクト）

「普通だったらね……。だけど今ここには、エンジェル隊の駆る紋章機がいる。１機でも、近衛軍一個艦隊と対等と噂される機体。……なによりそれを乗りこなすパイロットが女神のようなかわいい女の子たちなんだ。負ける気がしないね」

（ランファ）

『あっ……あっ、そう』

タクトの言葉に虚をつかれたランファは、小さく頷いて顔を背けた。ただ、頬が微かに赤くなってるように見えた。ちなみにミルフィーはうれしそうに身をよじって『かわいいだなんて……ありがとうございます』なんてのんきに喜んでいた。

（本当にかわいいね……彼女たちは）

その反応にほほえむタクト。そんな彼のゆるみきった表情にため息をつきながらレスターは尋ねた。

（レスター）

「それでタクト……どうするつもりだ？」

（タクト）

「うん……ミルフィーユとランファ、君たちは前方左側に展開する艦隊を攻撃してくれ。そしてフォルテ、君には少し無理をさせるが、前方右側の艦隊を頼む」

タクトの指示に、ミルフィーは笑顔で、

（ミルフィー）
『了解しました、マイヤーズ司令！』

ランファは自信たっぷりの表情で、

（ランファ）
『ふんっ、任せなさい！　あんなのすぐに倒してやるわ』

フォルテは余裕の笑みで、

（フォルテ）
『まかせな！　あのくらいの数、ハッピートリガーの敵じゃないね』

そう了解した。

（タクト）
「たのむ、みんな。……そしてオレたちは前方の敵を相手にする。だけど、無理に倒す必要はない。３人が応援にきてくれるまで持ちこたえればいい」
（レスター）
「こちらから先手をとって各個撃破の後、包囲戦に持ち込むのか」

レスターの言葉にタクトは頷く。

（タクト）
「ああ……包囲戦はスピードが命だ。戦艦なみの火力と戦闘機以上のスピードをもつ紋章機だからこそ出来る作戦だね」

タクトの考えに、しかしレスターは疑問を挟む。

（レスター）
「だが、本当に大丈夫なのか？　紋章機といってもサイズは大型の戦闘機程度だし、お前の望む性能を持っているかどうかもあやしい」
他人が聞いたら、なんと疑り深い人なんだ、と思うだろう。だがレスターは別に、悪口を言ってるワケじゃない。副官の仕事とは、司令官がまちがった命令を出してないかどうか、検査することである。
今回のことに関しても、生き残るため、作戦の確実性を高めようとそう言っているのだ。
そのレスターの言葉に、タクトはいつも通りにのほほんとした声で、

（タクト）
「お前がさっき言ったんじゃないか、『紋章機は宇宙最強とあだ名される機体』だって。その二つ名を信じようじゃないか」
（レスター）
「ふう……わかった。
全艦に通達！　これより我が艦隊はムーンエンジェル隊と共闘し、前方に展開する所属不明の艦隊群を攻撃する！　機関最大、全速前進！！　各艦、艦隊フォーメーションはデルタモード・オプションD（ディフェンス）！！」
レスターの号令に艦隊全体が慌ただしく動き始める。
その様子は、先ほどに比べ活力に満ちていた。

（ムーンエンジェル隊という、希望と共に戦えるからか……。ふん、その点だけでもあのうるさい女たちには感謝だな……）

隻眼の瞳でそれを見つめながら、エンジェル隊にレスターはひねくれた礼を心の中で呟いた。

（タクト）
「よし……作戦開始！！」

いつもののほほんとした声とは違う、なんとも凛々しいタクトの号令のもと、戦闘が始まった。

所属不明艦隊との戦闘は、タクトの予想した通りの戦いになった。
まず、そのスピードを活かしたランファのカンフーファイターが左側の艦隊に突撃、見事なヒットアンドウェイでかく乱。そこにミルフィーのラッキースターが、まさしく棚ぼた的な砲撃で艦隊を撃破。
フォルテのハッピートリガーは、その頑強な装甲で敵の攻撃をものともせずに射程圏内まで接近、そして温存していたエネルギーと弾薬のセーフティを解除、発射する。
その絨毯爆撃のような砲撃に、あっという間に敵艦隊は宇宙の藻くずと化した。
そしてタクトたち駐留艦隊は、前方の艦隊と正面からぶつかり、敵の攻撃に耐えながら巡洋艦1隻を集中砲火で撃沈。旗艦を沈められ、浮き足だった2隻は、エンジェル隊の集中攻撃にあっけなく沈んでいった。

（タクト）
「ふぅ……なんとか勝てた」

立って指揮をとっていたタクトはそう息を吐き、艦長席に沈むように座った。

（レスター）
「ああ……作戦とはいえ、生きた心地がしなかったぞ、まったく……」

いつもは冷静なレスターもさすがに初陣だったこともあり、そうため息をついた。
それもそうだ。同数の艦隊と正面から殴り合いをしたのだ。たとえ防御を重視し、シールドにエネルギーを割いていたとはいえ、いつ均衡が崩れるか、まさしく冷や汗ものだった。

（タクト）
「まあ、でも勝てたんだし、結果オ――」

その時、

（天使たちを統べる者よ……お前に『時の戦士』をあずける……運命に抗いたいのであれば、その者と共に戦え……）

声が聞こえた。

（タクト）
「えっ……？」

おもわずあたりを見回すタクト。そんな彼にレスターは不思議そうな目を向ける。

（レスター）
「どうした？　タクト」
（タクト）
「レスター……今、何か言った？」

わけがわからないタクトの質問に、うろんげな顔になるレスター。

（レスター）
「は？　何言ってんだお前――」

その瞬間、けたたましい警報がブリッジに鳴り響いた。

（レスター）
「どうした、何が起こった！！」
（オペレーター１）
「艦隊前方に、戦闘機と艦隊が出現！！」

オペレーターが慌てて報告した。

（レスター）
「何っ！？　敵の増援か！！」

レスターのその問いの答えは、意外なところから返ってきた。

（ランファ）
『フォルテさん！　あれ、ヴァニラのハーベスターじゃない！？』

ランファの言葉にフォルテも頷く。

（フォルテ）
『ああ、そうみたいだね』
（タクト）
「ということは……あの戦闘機も紋章機なのか？」

立ち上がったタクトの問いに、フォルテは緊迫した表情で頷く。

（フォルテ）
『ああ……紋章機の５番機……ハーベスターさ』

直後、コンソール画面に『ＧＡ００５ハーベスター』と表示された。

（レスター）
「紋章機の後ろにいるのは……例の艦隊か」

光学レーダーで捉えた映像には、宇宙空間にとけ込むような黒一色の艦が３隻、ハーベスターを追っていた。追われているハーベスターは機体各所に軽微ではない損傷が見受けられた。

（ミルフィー）
『でも、どうしてヴァニラがここに……お留守番じゃ？』

ミルフィーの疑問に、フォルテがコックピットに表示された時間を見て答える。

（フォルテ）
『この時間帯は、たしかヴァニラは哨戒任務に就いていたはず……。そこで敵艦に見つかったのかもしれないね』

（ランファ）
『それよりもフォルテさん！　はやくヴァニラを助けなきゃ！！
あの娘の機体はろくな武装がないのよ！？』

ランファの悲痛な叫びにフォルテは頷き、

（フォルテ）
『ああ、そうだね。ランファ！！　あんたは先に入ってな！！　カンフーファイターのスピードなら！！』

（ランファ）
『わかりましたっ！！』

フォルテの指示に素早くランファは機体を旋回させると、ハーベスターのところへ向かった。それにラッキースター、ハッピートリガーもつづく。

（タクト）
「レスター、オレたちも行こう！！」
（レスター）
「ああ。……だが間に合うか？」

その時、オペレーターの一人が声をあげた。

（オペレーター2）
「マイヤーズ司令！　前方の艦隊から高エネルギー反応！！　ハーベスターをロックオンしたようです！？」
（タクト）
「なんだって！？」

驚くタクト。

（ランファ）
『間に合ってーーっ！！』

ランファの悲痛な叫びがカンフーファイターのコックピットに響きわたる。しかし、その距離はあまりに遠かった。
誰もが、その先の光景を脳裏に想像した、その時――！！

（オペレーター３）
「マイヤーズ司令！！　艦隊とハーベスターの間に謎の転移反応！！」
（レスター）
「何っ！？　クロノドライヴかっ！？」

レスターの問いに、索敵担当のオペレーターは困惑の声をあげた。

（オペレーター３）
「わかりませんっ！？　こんな反応……見たことがないっ！？」

言葉遣いもわすれ、そう言うオペレーター。
そして、その転移は終わろうとしていた。

光の存在しない空間に突如、翠の閃光がはしったかとおもうと、
そこには、

（タクト）
「なんだ……あれは……？」
（レスター）
「ひと……なのか……？」

紺色の鎧と、一対の鋭角的な角兜を着込んだ鋼鉄の巨人……凶鳥の名を冠する機体『ヒュッケバインＭＫ－２』がいた。

第5話　『月の天使達（3）』（後書き）

やっと次回、ひさびさに主人公が登場します。（遅っ！！）仕事、及び携帯での更新のため、遅くなったりしますが、どうか気長に見てやってくださいｍ（＿　＿）ｍ　あと、感想があれば書いていただけると幸いです。

第6話　『遭遇戦』

ヒュッケバインＭＫ－２　コックピット

いきなりの命の危機と、突然のサイトロンシステム起動……それにより起こった眩い光に限界寸前だったケイは、突如鳴り響いた警報に、危うくパニックに陥りそうになった。
だが、頭に響いた静かな……そして悲痛な叫びに、どうにか落ち着きを取り戻した。

（たすけて……！！）
（ケイ）
「えっ――！？」

聞こえたと思った場所にＭＫ－２の頭部を向かせると、そこには傷ついた碧色の大型戦闘機がいた。そしてその反対側には、見たこともない黒色の戦艦が３隻、こちらに砲門を向けていた。

（あの戦闘機を撃とうとしているのかっ――！？）

そう思った瞬間には、ケイは手足を動かし、ＭＫ－２を戦闘機の前に躍りだしていた。

（ケイ）
「Ｇ・ウォール、最大出力で展開！！」

これにＡＩが警告メッセージを発する。
『敵の攻撃エネルギーが大きすぎます。このままでは危険です』
このメッセージにケイは怒鳴る。
（ケイ）
「そんなこと言われなくてもわかってるっ！！　それをどうにかしろっ！！」
言ったところで意味のないケイの文句。しかし、なんと意味があった。
『了解。……テスラ・ドライブ、オルゴンエクストラクター出力上昇。Ｇ・ウォール、ブレイク・フィールド、オルゴンクラウド多重展開、開始』
そのメッセージと同時に、ヒュッケバインの周りに幾重ものシールドが展開した。
次の瞬間、艦隊から撃ち出された攻撃が、ヒュッケバインに殺到した。

トランスバール皇国軍巡洋艦　ブリッジ

（タクト）
「どうなったっ！？」

タクトの言葉に、オペレーターは、

（オペレーター２）
「ハーベスター、被弾ありませんっ！！　すべてあの人型が受け止めました！！」
（レスター）
「身を挺して守ったのか……あの機体、仲間なのか……？」

レスターの呟きに、フォルテが首を横に振った。

（フォルテ）
『すくなくとも、あたしたちの仲間じゃないよ……』
（タクト）
「そうだろね……というかアレ、皇国軍のものじゃない。かといってクーデター勢力のものでも……」

そこで、オペレーターが驚きの声で報告を続けた。

（オペレーター２）
「謎の人型……健在ですっ！！　……すごい」

その言葉の通り、相当の攻撃を受けたにもかかわらず、光学映像で見る限り、損傷らしい損傷は見受けられなかった。
それどころか、その機体は右手に銃らしきものを持ち、その先端……銃口を黒色の戦艦たちに向けていた。

ヒュッケバインＭＫ－２　コックピット

（ケイ）
「お前ら……よってたかって攻撃するとは、どういうつもりだっ！！」

この非常事態に興奮したケイは、叫びＭＫ－２にフォトンライフルを構えさせると、テスラ・ドライブを全開にして突撃した。
敵対行動と見なしたのか、黒い３隻の戦艦は、あめあられと砲火の雨をＭＫ－２に降らせた。だが、

（ケイ）
「破アアアアッ！！」

ケイの駆るＭＫ－２はシールドを展開することなく、回避運動だけでしのいだ。

（見える……いや、わかる……！！）

どういう原理なのかわからないが、彼は敵の攻撃がいつ、どこに来るのかを前もって理解し、避けていた。

（それに……こいつら……）

ただの勘なのか彼自身理解できないが、この黒い戦艦群に人が乗ってないという答えを出していた。

（人が動かしてない……なら……っ！！）

ケイはＭＫ－２を中央にいる旗艦らしき艦に向かわせ、その側面を飛翔する。

（ケイ）
「ソード展開！！」
左手にビームソードを持ち、艦の装甲を横一文に斬り裂いていく。

（ケイ）
「破アアアッ」
そして右側にいた戦艦にチャクラムシューターを発射するとそのままの勢いで、そちらに移動、フォトンライフルを連射する。それから敵艦の装甲板を踏み台に近づいてきた反対側の艦に突撃。機関部にフォトンライフルの弾丸を叩き込み、3隻の距離が近づいたことを確認し、敵艦隊の上部（宇宙に上下は存在しないのでブリッジと思われる方）にテスラ・ドライブをブースとさせ急上昇。

（ケイ）
「《G・I・C》シーケンス、開始！！」
機体背部と腰部に装備されたパーツが連結し、一門の巨大なキャノン砲へと変形したそれを、ケイは密集した3隻の戦艦へと向ける。

（あの戦闘機は……よし、効果範囲外……）
戦闘機の位置を素早く確認し、ケイは艦隊の中心にいる戦艦に照準を合わせ、

（ケイ）
「ターゲット、ロックオン！　G・インパクトキャノン……オーバーシュートッ！！」

力強くトリガーを引いた。
砲門から飛び出した重力波は密集した艦隊を貫き、周囲の空間ごとその巨体を引き裂き、ひゃげさせる。そしてあまりに出力が高かったためか、マイクロブラックホールが発生し、狂暴な顎はその残がいさえ飲み込んでいった。

（ケイ）
「はあっ……はあっ……はあっ……」

機動兵器がもつものとしては、あまりに強大な威力に、ケイは荒い息を吐きながら驚嘆していた。
その時、広域通信が入る。

（？？？）
『助けていただき……ありがとうございます』

スピーカーから聞こえてきたのは、静かでおとなしそうな少女の声だった。

（この声……あの――）

頭に響いたあの声だった。
そう気づいた瞬間、

（ケイ）
「あっ……」

彼の意識は急速に闇へと飲まれていった。

トランスバール皇国軍巡洋艦　ブリッジ

（オペレーター2）
「……敵艦隊……消滅……」
呆然とした声でオペレーターが報告する。

（レスター）
「すさまじい……の一言しかないな……」
レスターもそう言うのが精いっぱいだった。

（タクト）
「……観測は、どうだった？」
ただ一人、タクトはいつも通りに（内心はわからないが）オペレーターに尋ねた。

（オペレーター3）
「……あの紺色の機体が放ったものは……どうやら高出力の重力波のようです。……あまりに高出力だったため、短時間でしたが、マイクロブラックホールまで発生していました」
観測オペレーターの報告に、タクトは乾いた笑みをうかべる。

（タクト）

「なかなかに……えげつない攻撃だね」

ブラックホール……それは、宇宙船乗りが最も危険視する宇宙の天災であった。

その虚空の顎につかまっては、ロストテクノロジーの結晶である紋章機さえも、どうすることもできないだろう。

……それを機動兵器の武器にするとは……。

（ランファ）

『そんなことより、ヴァニラよっ！！　ヴァニラ、ヴァニラっ！！

応答しなさいっ！！』

皆があまりにも強力な攻撃を目のあたりにし黙り込んでいたが、ランファの言葉に気持ちを切り替える。

（タクト）

「そうだった……ハーベスターの状況は？」

（オペレーター１）

「ハーベスターは健在です。いっさいの被害も受けていないようです」

タクトの問いに、オペレーターの一人がそう応える。

（フォルテ）

『ヴァニラ、無事かい？』

ランファとフォルテの通信に、

（ヴァニラ）

『はい……大丈夫です』

静かな声が、通信機をとおしてそう応えた。

（ミルフィー）
『よかった〜〜。
心配したんだよ、ヴァニラ』

通信を聞き、ミルフィーはなんともうれしそうな声をあげる。

（ヴァニラ）
『すみません、心配をおかけして。……ただ』
（ランファ）
『ただ？　何よ、どうしたの？』

ランファの問いに、ヴァニラという少女はただただ静かに告げる。

（ヴァニラ）
『さきほど私を助けてくれた方が……意識を失ってしまったようです』
（ミルフィー）
『え〜〜っ！？　タイヘンですっ！！　どうしましょう、フォルテさん！！』
（フォルテ）
『どうするってもねぇ？』

ミルフィーの問いかけにフォルテも困った顔になる。そこで、タクトが話に加わる。

（タクト）
「ヴァニラ……だったかな。君の紋章機で、この艦まで曳航できな

いかな？　こちらで収容しよう」

彼の提案に驚いたのはレスターだった。

（レスター）
「おい、タクトっ！？」
（タクト）
「なんだよ、レスター」
（レスター）
「あんなわけのわからん機体を収容だとっ！？　お前はバカかっ！！」

身も蓋もない副官の罵声に、しかしいつもののほほんとした顔で、

（タクト）
「バカはあんまりだろ？　レスター。それにあの機体は紋章機を助けてくれたんだぞ？　お礼の一つも言わないなんて、失礼だろ？」
（レスター）
「だからお前はバカなんだっ！！　敵かもしれないんだぞっ！！」
（タクト）
「だけど、味方かもしれないじゃないか」
（レスター）
「〜〜っ！　ああ言えばこう言うっ！？」

怒るレスター。その姿に、タクトも真面目になるしかないと判断し『司令官』として副官に言う。

（タクト）
「レスター……。確かに敵か味方か、今の段階では判断できない。だけど、このまま放置しておくのも危険だ。

もしあれが、クーデター勢力のものじゃなかったら、そしてあれがクーデター勢力に回収されたらどうなるか……。レスター、お前ならわかるだろ？」

いつもと違うタクトの態度に『本気』を感じ取ったレスターは、彼の言葉を慎重に吟味し、

（レスター）
「ふぅ……わかった。たしかにあれだけの兵器が敵の手に渡るのは、危険きわまりない。
そしてたとえ敵のものであっても、こちらで回収すれば対抗策を講じる手がかりになるか。
だが、パイロットは拘束する。それだけは譲れんからな」

レスターのその言葉にタクトはうれしそうに頷いた。

（タクト）
「さすがはレスター、頭の回転が早くて助かるよ」
（レスター）
「ふっ……おだててても、何もでんぞ」

と、そこで二人のやり取りを聞いていたフォルテから通信が入る。

（フォルテ）
『話はまとまったかい？　それじゃ、行こうか』
（タクト）
「えっ？　行こうかって？」

彼女の言葉におもわず聞き返すタクト。

（フォルテ）
『実はね、あたしたちはある人物から、あんたを連れてくるように頼まれたのさ』
（タクト）
「ある人物って……？」
（フォルテ）
『あたしたちにあんたの名前を教えてくれた人物……あんたが知っている人物』

フォルテの謎かけのような言葉に少し考え、タクトはレスターに目をやり、

（タクト）
「レスター……」
その視線にレスターは今日何度目かわからない溜め息をつき、

（レスター）
「ふぅ……わかった、わかった。お前の好きにしろ。……少なくとも、何らかの情報は手に入るだろうし」
（タクト）
「ありがとう、レスター。……ということで、エンジェル隊のみんな。その、『ある人物』のところへ連れてってもらえるかな」

タクトの言葉にフォルテは頷き、

（フォルテ）
『わかったよ。それじゃ、行こうかね』
（ミルフィー）
『あたしたちの後を、ついてきてくださいね！』
（タクト）

「ああ」

ハーベスターが回収した謎の機体を艦に収容し、タクトたち駐留艦隊3隻は紋章機の先導の元、この宙域から移動を開始した。

（それにしても……）

レスターが部下たちにそれぞれ指示を出しているのを横目に見ながら、タクトは心の中で呟く。

（あの声はいったい……『時の戦士』……もしすると、あの機体が……）

タクトの聞いた言葉。

それは後に、銀河の終焉を決する戦いで、その意味が明かされる。

しかし、それはまだ先の話であった。

第6話　『遭遇戦』（後書き）

感想を書いていただければうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6949c/

スーパーロボット大戦ＬＡ

2010年10月28日05時52分発行